

1930年正月

父に抱かれる昭彦と彰子



昭彦の幼い頃

小野彰子

小学校へ上がるまでの幼児期を、昭彦と私は鎌倉で過ごしました。一人ずつ傅が付き、大人の愛情を集め、それは恵まれた数年でした。

海がすぐ近いので、一年中通して磯歩き、砂遊び、だぼはせ釣り、貝拾い、そして夏には泳ぎ、波乗り、浜遊び、また家が小さい山に囲まれていたところから、小山登り、小牧場を走り廻る等の体験の他、いろいろの階層、年齢層の友達と芝生の庭であらゆる「こっこ遊び」をし、それは楽しい毎日でした。

しかし私連にとって、一番強烈な印象は「カニ取り」で、これは他の子供達には興味がなかったのか、いつも二人だけで、幼稚園に上がっても、事情

AKIHIKO 忌に集う
没後9年

春のうらかな一日、AKIHIKO忌がおこなわれた。三月二十六日、東京文京区にある岡村家の菩提寺の吉祥寺は、お彼岸も過ぎたばかりであり、静かななかにも花がこここに供えられ、しっとりとした雰囲気を感じ出していた。境内の北側の奥まったところにある岡村家の墓前では、昭彦の会のメンバーの新たな出会いもあったという。

吉祥寺から十五分ほどの文京区勤労福祉会館では午後から、記念の講演会と懇親会があった。中川道夫さんはカメラマンの立場から、小野彰子さんは至近距離の奥姉の立場から、物理学者の武谷三男さんは岡村さんを回想して、それぞれにとっての岡村昭彦を語った。

懇親会は自己紹介と一言からスタートしたが、例によって、夜までの延長戦となった。岡村さんが私たちのもともとから去って九年目になるが、彼の残した「気」は消散するどころか、いよいよ形をなしつつあるようだ。

(呼びかけ人・池上正治)

母、順子(のぶこ、60年代)



「今日はどんな発見がありました？」

- 病身のその母は、毎晩ぼつりとうこう言った -



岡村昭彦さんの写真を読む 中川道夫

岡村昭彦は写真がヘタだと云われてきた。それは過剰なほどの文章表現と弁舌のたくみさがその写真の評価を遠ざけていたのかもしれない。岡村の多方面の仕事はともかく、わたし達が岡村の写真にいつも惹かれるのはなぜだろうか？ 私じしんも写真表現にかかわるものとしてヘタな写真家につきあう理由はないが、中学から高校生へと岡村の写真に出合っていたら、日本の写真家のなかで妙な違和感と魅力とをもったその写真群。それはヘタとかうまいとか、また映っている事実の意味の重さとは別の次元で永くわたしにとつての謎だった。

数年まえ、写真誕生一五〇周年の年で日本でもその表現の歩みが回顧された。それは日本の写真史の読み直しでもあったが、報道写真、とりわけベトナム戦争の写真家の存在が相対的に低下した。そんないま、岡村昭彦は写真史のなかでどう位置づけられるよいのだろうか？

岡村の写真は戦後日本の写真表現の文脈のなかで生まれた。岡村作品のもつ謎を解くにはその脈絡を再読することから始めたいと思う。

土門拳のリアリズム写真から東松照明らのV.I.V.O.の映像主義。そしてベトナム報道へ。岡村はそんななかでうぶ声をあげて、国際的グラフィカガジンの

「LIFE」でデビューする。

「LIFE」はナチスや全体主義の圧迫のなかでアメリカで生まれた。岡村は日本の戦後写真のしつぽをつけながら欧米流のグラフィジャーナリズムの写真文体にひかれつつ成長した。フォトエッセイ、ドキュメンタリーでもなく告発調でもないその方法は岡村昭彦を魅了しつづけた。

沢田教一、石川文洋、そして岡村昭彦。ベトナム戦争を目撃した多くの写真家のなかで質量ともに傑出した二人の作品を比較することで、二人が見た戦争の断面やそのメンタリティーのちがいが分かるだろう。

それはベトナム以後の岡村の写真を考える手がかりになる。

写真は永く絵画的美学を模倣し、そしてその枠組みのなかで発展してきた。黄金分割や線遠近法だ。それに自覚的だった岡村は「絵になる写真などありません、写真は写真です」と。写真と絵画の距離を意識していたのだからと思う。岡村の写真がヘタだと云うのも絵画的美意識からわたし達がいったん自由になり、再度それを見直すことが、岡村昭彦の写真の魅力を理解する出発点になるのではないかと思っている。

(なががわみちお 写真家)





持ちで待っていて、帰りは、先生が一人ずつお供に園児を渡したものでした。小学受験勉強も今のテレビと同様のことをやらされました。一人ずつ別々に、豆拾い、五桁数の逆数をいう等々。六〇年前から同じことをやっているのも面白いことです。

武谷三男

私は昔から写真機をいじっていた。かつてブラジルで熱心に写真を撮ったこともある。

岡村昭彦君の写真をはじめて展示会で見たとき、ライフのカメラマンというさらには派手なものかと思っていたが、そうではなく、自然なという感じなので気に入りました。

昭彦君の写真は、いわゆる雄弁ななんてものではない。彼の演説は政治家になつたらと思うほどだったが、写真はそうではない。はじめはパースとというほどには印象に残らないが、じつとみているうちにいろいろのことを言っているのが分かってくる。そういう写真だ。

たとえば、あの体力でベトナムのいろんなところへ出かけていき、残虐な目に遭っている被写体に出会い、これを写しておけばいい写真になるというような、

とにかく、昭彦がもっと長生きして、もっと年寄りになってから二人で、「カニ取りは天才だったね」等話し合いたかったとつくづく思います。

(おのあやこ)

昭彦君の写真について

そんな感じではない。こちらから撮ると住民の味方になるといったちよろい考えではやっていない。

断然として写している。それでいて、つかまえるものはちゃんとつかまえている。自分が民衆であるというフリーの立場を貫いている。

岡村の写真やルポには心がこもっている。しみじみと、なるほどねという気持ちになってくる。印象に残る重みがある。私もフリーみたいなものなので、彼のフリーという立場に共感を持つ。お雇いの大新聞の記者ではできない仕事を、彼はなし遂げた。

私はいま八二と三の間にいるが、若い人が、特に昭彦君のような頼りになる人が死ぬのは困る。みなさん元気でいて下さい。これは老人からの言葉であります。

(たけたにみつお 物理学者)

「読む会」会費（通信費等）

¥3000（6カ月）

「岡村昭彦を読む会」の会費（通信費等）を1回1人500円とし半年分として3000円を一括徴収したいとおもいます。参加できない人で当会の資料等をご希望の方も会員同様の手続きをしてください。また、運営・役割のほか、アイデア・企画等で積極的なサポートを期待しています。米沢慧までお申出ください。

（東京都中野区鷺宮5-6-5/TEL03-3970-5507/FAX03-3970-5282）

「岡村昭彦を読む会」

第1回報告

「岡村昭彦を読む」第1回（2月26日）は、「歩み出すための素材」として最後のテレビ出演となったNHK「訪問インタビュー」（'84、1回20分×4回の80分）を観ることにしました。

前半の2回は①カメラは武器である②歴史をみる目、後半は③生命をみつめる④病院が病院となるために――。

映像は、早朝の舞阪港に始まる生産点からの視点に始まり、神経科医療改革の実現場場まで、場所を移し、自らの衣装を替えて語る構成は、10年という時間を超えて“死んでいない”岡村昭彦の現在をみることになりました。

岡村昭彦は画像を通して、これまで何をしてきたか。今何をやっているか。そしてこれから向こう10年、何をやっていこうとしているかを禪身の力で表現していました。「いまどきほんとうの役者がいなくなったな」とへんな感想を口にしながら見入ってしまったほどでした。

しかも、③生命をみつめる④病院が病院になるために――は、10年後の現在に向けても、依然としての的を射たメッセージとなって届いており、緊張を強いられました。

会場では、生前の岡村昭彦を知らない若い人の参加もあり、画像から飛び出す“ことば”をノートに書き移す姿もありました。

会参加希望者はざっと30人、第1回の参加者は14名でしたが今後の会合が楽しみになってきました。

会としての成果は急がずにじっくりと丁寧に私たちの時代の課題と重ねながら進めたいとおもいます。第2回は別掲の通りです。ぜひ、ご参加ください。（米沢 慧）

「岡村昭彦を読む会」第2回（予告）

5月7日（土）

午後1時～5時

会場 東京都千代田区三崎町三一一一 倫理研究所

八階第二会議室 TEL 03-32264-2251

内容 第一部 著作集第1巻「南ヴェトナム戦争従軍記」を読む

第2部 われわれはどんな時代に生きているのか

レポート「家族はどこに向かっているのか」米沢慧

（*第一部の展開次第では取り止め）

事務局だより

1 三月二十四日、日本テレビ系の「今日は何の日」で、報道写真家、岡村昭彦さんの命日であり、カメラを武器に民衆の側からヴェトナム戦争を報道した人であるということが、その生い立ちとともに紹介されました。ビデオご希望の方は白石さんまでご連絡下さい。

白石 TEL03-3831-5106
FAX03-3837-2440

なお、十月頃までには今回の番組も含め、静岡県民テレビで放映された舞阪を舞台とした数回分もまとめたビデオテープをつくる予定です。できましたら連絡いたします。

2 郵便振替口座を開きました。

口座名称 岡村昭彦の会

口座番号 001700-6-615123

3 「発足の会」「AKIHiko忌」のテープ（各一本二時間）ご希望の方にお届けします。郵便振替、利用のうえ代金（一本千円送料込み）を振込んで下さい。振込み通知を受け取りしだいお送り致します。

4 会員の栗原達男さんから写真集「名作ひとり旅」（トラベルジャーナル・刊）を会にいただきました。この本の中で岡村さんのことについておられます（別紙参照）。東京では終了しましたが、大阪、名古屋、札幌ではこれから写真展が開催されます。